

(解説)

本多静六と関連する長野県内の公園・温泉地・風景地の
計画書の目録および現代的価値

List and Modern Value of the Planning Documents for Parks,
Hot Spring Resorts and Scenic Areas in Nagano Prefecture
related to Seiroku Honda

横 関 隆 登*

Takato YOKOSEKI

1. 序論：本多静六と公園づくり

本多静六(1866-1952)とは、明治期から昭和期に活躍した著名な林学者である。その存在は、国語辞典

や人名辞典、英文の日本事典の解説(表-1)から確認が出来るとおりの既知の事実である。象徴的なのは、いずれの辞書等の解説においても代表作として

表-1 辞典等にみられる本多静六の解説

出典	解説
『日本国語大辞典 第二版』 (2000-2002年, 小学館)	ほんだ - せいろく【本多静六】林学者。埼玉県出身。日本最初の林学博士。日比谷公園などを設計し、国立公園の設置に尽力した。帝国森林会会長。著書「本多造林学」など。慶応二~昭和二七年(一八六六~一九五二)
『日本人名大辞典』 (2001年, 講談社)	ほんだ - せいろく【本多静六】1866-1952 明治-昭和時代の林学者。慶応2年7月2日生まれ。ドイツ留学後、母校帝国大学の助教授。「日本森林植物帯論」で日本初の林学博士となり、明治33年東京帝大教授。日比谷公園 明治神宮など各地の公園や庭園を設計した。昭和27年1月29日死去。85歳。武蔵(むさし)埼玉郡出身。旧姓は柳原。著作に「本多造林学」など。
『Japan : An Illustrated Encyclopedia』 (1993, Kodansha, Japan)	Honda Seiroku 【本多静六】1866-1952 Dendrologist. Born in what is now Saitama Prefecture; graduate of Tokyo Agriculture and Forestry School (now part of Tokyo University). He studied forestry and economics at Munich University in Germany and served as assistant professor and professor at Tokyo University from 1893. A pioneer of modern dendrology, he became chairman of the Imperial Society of Dendrology late in life. He also made a lasting contribution to the beautification and preservation of the natural environment, including the design of the Meiji Shrine gardens and the establishment of a number of national parks. He is the author of Zōringaku kakuron (1927, Studies on Afforestation).
『信濃毎日新聞』朝刊記事 (2011年7月22日, 信濃毎日新聞社)	【本多静六】1866~1952年。埼玉県久喜市出身。東京帝大農科大学(現東京大農学部)を卒業後、ドイツに留学。日本で初となる林学博士の学位を取得した。日比谷公園(東京)をはじめ、全国各地で公園を設計し、「日本の公園の父」と呼ばれる。県内では臥竜公園のほか、小諸市の懐古園の設計も手掛けた。【引用】「臥竜公園今昔ものがたり(中)本多静六の思想 風土生かす設計 学び今も」、信濃毎日新聞、2011年7月22日、朝刊、p.24

*環境ツーリズム学部准教授

日比谷公園（東京都千代田区）の設計業務が取り上げられている点にあり、本多静六を語る上で重要なのは公園づくりであることがわかる。

本多静六の生まれは旧武蔵国埼玉郡河原井村、現在で言うところの埼玉県久喜市菖蒲町にあたる。この所縁から久喜市は、菖蒲総合支所に本多静六記念館を設置し、本多静六の顕彰事業に取り組んでいる。その一環として編集発行された冊子（久喜市企画政策課編集、2013）は、本多静六が計画に携わった公園等の特徴を把握出来ることから注目すべきである。この冊子によれば、本多静六が計画に携わった公園等は、32都道府県に渡る61箇所と、全国各地に及んでいたことがわかる。

上記の数値を都道府県別に再集計したところ、61箇所中の32箇所もの公園等は、25都府県別に1から2箇所の頻度で立地する傾向と、残りの7道府県に61箇所中の29箇所もの公園等が立地する傾向が確認出来た。この確認を換言すれば、本多静六と都道府県の関係に疎密があったことと指摘出来る。このうち本多静六が計画に携わった公園等の最多地域は、6箇所を数えた長野県であった（表-2）。その後には5箇所を数えた愛知県と埼玉県が続く。上位に位置する長野県と愛知県、埼玉県は、本多静六が生活の拠点を置く東京都の周辺に位置することから、移動距離が影響要因としてあげられる。しかし、上位3県の移動距離と類似する条件ならば、他にも神奈川県、山梨県、群馬県、千葉県等をあげられるため、他の要因として人間社会的な影響も併せて効いていると想定される。ただし、こうした想定に解答可能な学術的評価は、まだ定まっておらず、研究展開が待たれる。

以上の問題意識から、本多静六が計画に携わった公園等についての理解を深めていく上で、先駆的な都道府県を単位とした事例研究の推進が必要と考えられた。長野県は、最多県である他、本多静六が地元の新聞記事で紹介される（表-1）等の現代的な認知もあることから、先駆的な地域に位置付けられる。そこで、本稿は、長野県を対象に、本多静六と関連する公園等の基礎的な整理と現況の解説を行う。

2. 本論：長野県と本多静六の計画書

(1) 計画書の目録

本多静六が公園等の計画に携わったとしたら、計画書が残っているはずである。本多静六記念館への問い合わせ、そして国立国会図書館が提供する蔵書

検索用データベースから得た論説（例えば、熊谷ら、1995）を基に情報を照合したところ、計画書の所蔵先は、本多静六がかつて勤務していた、東京大学（当時は東京帝国大学）にあることがわかった。東京大学の協力で現物確認を取ったところ、長野県内を対象とした計画書を9点確認した。この9点の計画書には、先述した冊子に掲載されていない新たな計画書が3点含まれている。

新たな計画書3点とは、明治期に提出された軽井沢の計画書および年代が明記されていない状態となっている木曾地方の計画書合計2点である（表-3）。実は先述した冊子には本多静六の生涯を記した年譜が付加されており、本多静六が1905（明治38）年に長野県県有林の顧問（久喜市企画政策課編集、2013）に就いていたことがわかる。長野県に県営林制度は、1904（明治37）年に創設（中村、2001、2002）されていた。さらに長野県内務部林務課は1913（大正2）年に『長野県の林業』にて、長野県が軽井沢と木曾地方に避暑地の開発を想定していると述べ、かつここで本多静六に「軽井沢と木曾の調査研究委嘱」（長野県内務部林務課、1913）をしたと説明した。これを踏まえて、軽井沢の計画書が発表された時期を確認すると、1911（明治44）年とあり、先に紹介した長野県内務部林務課の説明は信憑性が高いと考えられた。また、『隠れたる木曾の風景と利用策』は、雑誌『太陽』に同じ内容が1913（大正2）年に掲載された。したがって、木曾地方の計画書2点は、1913（大正2）年前後に

表-2 都道府県別の本多静六関連公園等の箇所数

順位	箇所	比率	都道府県
1	6	9.8	長野県
2	5	8.2	愛知県
”	5	8.2	埼玉県
4	4	6.6	福岡県
5	3	4.9	北海道
”	3	4.9	大阪府
”	3	4.9	広島県
8≥	計32	52.5	計25都府県
-	61	100.0	32

註）久喜市企画政策課編集(2013)を基に筆者集計。

発表されたと言えると考えた。

以上の整理から、本多静六と関連する長野県内の計画書は9点確認され、箇所数に換算すると8箇所と結論付けられる。これら8箇所は、現在の長野県に現存する著名な公園や温泉地、風景地であった(表-3)。

(2) 計画書の所在

それでは本多静六と関連する長野県内の計画書は、計画地が位置する長野県内で閲覧出来るのだろうか。長野県内に位置する全ての公共図書館の蔵書検索用

データベースおよび国立国会図書館が提供するオンラインサービスから情報を収集したところ、長野県の公共図書館で6点もの計画書の所蔵が確認出来た(表-4)。その一方で3点もの計画書は、長野県の公共図書館で所蔵が確認されなかった。これは長野県内で閲覧が困難と考えられ、課題点を見出した。

また、併せて更に詳細な確認作業として、計画地の図書館における本多静六の計画書の原本の所蔵状況を追加で確認した。この確認条件まで絞り込めば、該

表-3 本多静六と関連する長野県内の公園・温泉地・風景地の計画書の目録

No	著者	執筆	図面	年月日	題目	発行	現在
1	本多静六	口述	無	1911(明治44).10.30	軽井沢遊園地設計方針	不明(口述は油屋旅館)	民間別荘地
2	本多静六	口述	無	1913(大正2)前後 *註1	木曾風光調査概要	不明	日本遺産木曾路
3	本多静六	著述	有	1913(大正2) *註2	隠れたる木曾の風景と利用策	不明	〃
4	本多静六・上原敬二	著述	有	1923(大正12).5.10	信州駒ヶ岳森林公園と菅の台避暑地計画案	赤穂町商工会	駒ヶ根公園等
5	本多静六・池邊武人	著述	有	1925(大正15).5	須坂町公園設計案	須坂町役場	臥竜公園等
6	本多静六・池邊武人	著述	有	1925(大正15).5	小諸公園(懐古園)設計案	小諸町役場	小諸城址懐古園
7	本多静六・森脇龍雄	著述	有	1927(昭和2).6	信州飯山城址公園改良案	飯山町役場	飯山城跡公園
8	本多静六・森脇龍雄	著述	有	1927(昭和2).7	信州山ノ内温泉風景利用策	長野電鉄株式会社	湯田中渋温泉郷
9	本多静六・森脇龍雄	著述	無	1928(昭和3).5	天竜峡風景利用策	伊那電気鉄道株式会社	国指定名勝天竜峡

註1) 東京大学所蔵資料は欠年。『長野県の林業』(1913)『太陽』(1913)を基に想定。註2) 東京大学所蔵資料は欠年。同書は『太陽』(1913)掲載。

表-4 本多静六と関連する長野県内の計画書の所蔵状況と自治体ホームページの掲載状況

No.	計画書名	長野県内公共図書館所蔵状況	計画地の自治体名	自治体ホームページ掲載状況
1	『軽井沢遊園地設計方針』	国立国会図デジ	北佐久郡軽井沢町	
2	『木曾風光調査概要』		木曾広域連合	
3	『隠れたる木曾の風景と利用策』	県立長野図	〃	
4	『信州駒ヶ岳森林公園と菅の台避暑地計画案』	伊那市立図、飯田市中央図、国立国会図デジ	駒ヶ根市	
5	『須坂町公園設計案』	市立須坂図、県立長野図	須坂市	臥竜公園の計画者として紹介
6	『小諸公園(懐古園)設計案』	市立小諸図	小諸市	懐古園の計画者として紹介
7	『信州飯山城址公園改良案』	市立飯山図	飯山市	
8	『信州山ノ内温泉風景利用策』		下高井郡山ノ内町	
9	『天竜峡風景利用策』		飯田市	天竜峡への来訪者として紹介

註1) 自治体ホームページ掲載状況調査は、自治体ホームページ上の全文検索機能を使用した結果(11/20最終閲覧)。

註2) 国立国会図デジはオンラインサービスを提供する国立国会図書館デジタルコレクションのこと。多くの長野県内図書館で館内限定閲覧可能。

当する計画書と図書館は『須坂町公園設計案』（市立須坂図）、『小諸公園（懐古園）設計案』（市立小諸図）、『信州飯山城址公園改良案』（市立飯山図）の3点に限られた。つまり、少数ながらも本多静六の計画書は、市民が地域で閲覧出来る状態にあった。他にも、計画地の市民が目にする機会が多い自治体ホームページ上で本多静六の情報を検索したところ、須坂市と小諸市で本多静六が計画者として紹介されていることが確認された。これらの確認結果は、計画地における本多静六の認知度と関連すると考えた。つまり、図書館に本多静六の計画書が所蔵され、市民が閲覧出来る状態となっていることに重要点を見出した。

3. 結論：公園等の価値を磨くブランド化手段

本多静六の生涯は、2006（平成18）年に評伝（遠山, 2006）として縁戚が取りまとめて書籍化された。本評伝は、全国的な視野から本多静六の公園づくりを論じたものであり、当然のことながら、日比谷公園の計画は代表作として紹介された。一方、本多静六による「都市公園設計の思想」の解説には、須坂市の臥竜公園（『須坂町公園設計案』）と小諸市の懐古園（『小諸公園（懐古園）設計案』）を根拠に取り上げている。本多静六の仕事から見れば、本稿で重要な地域と指摘した須坂市と小諸市は、全国区の公園であることがわかる。このような状況を鑑みれば、類似する飯山市の飯山城址公園は、『信州飯山城址公園改良案』を活用する余地を残していることがわかる。さらに本評伝では、他県の事例であるが「由布院温泉の発展と本多静六」の中で現在の全国区屈指の温泉地である由布院温泉が成功したきっかけの一つに本多静六の計画書の存在があったと解説している。このような状況を鑑みれば、類似する山ノ内町の温泉街もまた、『信州山ノ内温泉風景利用策』を活用する余地を残していることがわかる。他にも地方新聞（表-1、図-1）またはイベント（図-2）等を通じて、長野県内には本多静六に向けたまなざしがあるように思える。本多静六による計画書は、軽井沢町や木曾地方、駒ヶ根市、飯田市においても、観光地形成に有用な知見となることを見込まれる。

現代的に本多静六の計画書に再注目することは、長野県の地域づくりと、共に全国的な公園研究双方に対して示唆に富んでいる。長野県の郷土史家を始めとする、多様な市民の方に本多静六の計画書を再

注目いただきたい。一方、本多静六の計画書は、先に述べた通り、市民が閲覧出来るものは一部に限られていた。また、それを閲覧したとしても70年以上前に記された文章は読み手が解し難い。その課題改善の一助となればと考へ、長野大学環境ツーリズム学部の学生有志と教員は、本稿で目録化した計画書（表-3）の現代語訳を制作した。読み易さの基準は、学生が判断しているため、若者の感覚を含んでいる。本稿の後に掲載されるので、是非とも手にとって頂ければと思う（表-5）。



- 左) 信濃毎日新聞記者：臥竜公園今昔ものがたり（中）＝本多静六の思想 風土生かす設計一学び今も：2011年7月22日，信濃毎日新聞朝刊，p.24 抜粋
- 右) 酒井章子：【書評】本多静六・日本の森林を育てた人 林学の開拓期、大きな影響残す：2007年4月22日，信濃毎日新聞朝刊，p.11 抜粋

図-1 信濃毎日新聞記事の見出し

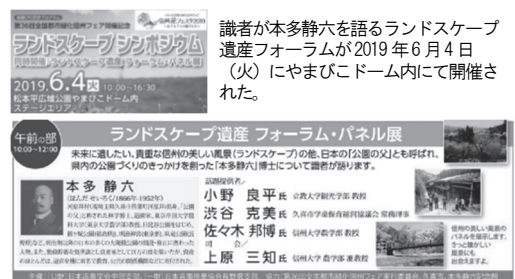


図-2 第36回全国都市緑化フェア配布チラシ

謝辞

現代語訳の作成に関わったのは、大井智世、藤原優里、渡邊ほのか、KIM HYUNG JOON、阿部菜々子、磯田風南、太田千乃、尾沼裕太、加藤愛望、北條千晴、小池成美、小林来実、齋藤実咲、笹川将人、関谷里奈、竹内梢、西村奈穂、半澤成美、北原穂香、工藤姫香、下條仁嗣、柳澤紅音の各氏である。完成にこぎ着けた背後に、突如として始まったオンライン授業に適応した各氏の努力がある。ここに感謝と敬意を表する。

参考文献

本多静六 (1913) 隠れたる木曾の風景と利用策：太陽 19(6), 136-150.
 久喜市企画政策課編集(2013) 本多静六博士没60周年

記念事業「日本の公園の父 本多静六」：久喜市企画政策課, 40pp.
 熊谷洋一・下村彰男・小野良平 (1995) マルチオピニオンリーダー本多静六-日比谷公園の設計から風景の開放へ：ランドスケープ研究58(4), 349-352.
 長野県内務部林務課 (1913) 「長野行政ニ關スル本縣ノ施設」(『長野県の林業』長野県内務部林務課編)：長野県内務部林務課, 7-27.
 中村 慎 (2001) 長野県国有模範林の誕生の経緯(第1報)：森林文化研究 5, 13-16.
 中村 慎 (2002) 長野県国有模範林の誕生の経緯(第2報)：森林文化研究 6, 16-20.
 渋谷克美 (2020) 「信州花フェス」で本多静六博士の功績を紹介：本多静六通信28, 8-9.
 遠山 益 (2006) 本多静六日本の森林を育てた人：実業之日本社, 298pp.

表-5 本稿と関連した長野大学紀要第42巻第3号の題目一覧

項	分類	題目	著者
71-75	解説	本多静六と関連する長野県内の公園・温泉地・風景地の計画書の目録および現代的価値	横関隆登
76-82	資料	本多静六口述『軽井沢遊園地設計方針』(明治四十四年十月三十日油屋旅館に於て)の現代語訳	阿部菜々子・北條千晴・半澤成美・横関隆登
83-90	資料	本多静六口述『木曾風光調査概要』(大正二年前後)の現代語訳	竹内梢・加藤愛望・小林来実・横関隆登
91-98	資料	本多静六著『隠れたる木曾の風景と利用策』(大正二年)の現代語訳	加藤愛望・小林来実・竹内梢・横関隆登
99-116	資料	本多静六・上原敬二著『信州駒ヶ岳森林公園と菅の台避暑地計画案』(大正十二年五月十日赤穂町商工会発行)の現代語訳	齋藤実咲・小池成美・阿部菜々子・北條千晴・横関隆登
117-124	資料	本多静六・池邊武人著『須坂町公園設計案』(大正十五年五月須坂町役場発行)の現代語訳	西村奈穂・下條仁嗣・藤原優里・横関隆登
125-135	資料	本多静六・池邊武人著『小諸公園(懐古園)設計案』(大正十五年五月小諸町役場発行)の現代語訳	半澤成美・西村奈穂・横関隆登
136-142	資料	本多静六・森脇龍雄著『信州飯山城址公園改良案』(昭和二年六月飯山町役場発行)の現代語訳	太田千乃・北原穂香・渡邊ほのか・横関隆登
143-152	資料	本多静六・森脇龍雄著『信州山ノ内温泉風景利用策』(昭和二年七月長野電鉄株式会社発行)の現代語訳	下條仁嗣・藤原優里・太田千乃・横関隆登
153-160	資料	本多静六・森脇龍雄著『天竜峡風景利用策』(昭和三年五月伊那電気鉄道株式会社発行)の現代語訳	北原穂香・渡邊ほのか・齋藤実咲・小池成美・横関隆登